

国家形成のモニュメントとしての古墳

河 野 一 隆

【要約】 国家形成と軌を一にして特殊な構造と豊かな副葬品を備えた厚葬墓が登場することの追求は、人類史的な課題でもある。本稿では弥生―古墳時代の倭王権から倭国への変化の中に、日本列島における神聖王権から初期国家への移行過程の歴史的特質が埋め込まれているとみる視点から、弥生王墓や古墳の変遷を再整理し、モニュメントとしての古墳造営の意義を考察した。なぜ、特定個人の墓の造営に莫大な社会のエネルギーが集約されるのか。また、それがなぜ国家形成期に登場するのか。これらの説明として、王権の支配領域外から流入する財を、王権の領域内部で計画的かつ安全に消費するために、財を威信財へと意味転換し、その交換および消費に伴う負債関係を、現実の社会政治的関係の基軸へと読み替えるシステムが社会成員によって創出され、それが社会に埋め込まれたという視角を提唱する。同時に、財による中心―周辺関係の形成が、境界を生み出すことで、律令制国家の前段階がすでに古墳時代中期には現出していたことを想定した。しかし、このようなメカニズムは、倭王権による渡来系技術者の掌握・配布によって破綻し、古墳造営は公共性の創出機能を喪失する。ここで国家形成における厚葬墓は、その役割を終えることになる。

史林 九一卷一号 二〇〇八年一月

第一章 王権論からみた問題提起

葬送儀礼の分析から社会組織や社会構造を追求する研究は、考古学では古くから取り組まれた中心的な課題の一つであ

る。特に埋葬法の様式差を社会の階層性の反映と見なし、社会の複雑化の昂進過程や国家形成の問題と絡めた研究は、日本考古学のみならず枚挙に暇がない。^①たとえば、V・G・チャイルドは葬送儀礼が現実の社会構造や社会関係の直接あるいは間接の反映として捉え、彼の提唱する「都市革命」を定義する要素として葬祭祀念物を挙げている。^②ところが、象徴考古学によって葬送資料の考古学的分析から社会構造にアプローチする方法論が懷疑的に捉えられるようになり、日本の古墳時代研究も、古墳文化の記述・解明から社会史を志向するものへと大きな転機を迎えることとなった。その契機となった都出比呂志の「前方後円墳体制論」では、古墳時代をクラッセンとスカルニックが提唱する初期国家段階と捉え、以下の三点に着目している。^③第一は、エンゲルスの国家論では未開か文明かといった二分法の弊害のため、国家形成過程の諸変革に適切な歴史的評価が与えられなかったこと、第二は、国家形成過程は国家への過渡期としてではなく、独自の時代的特質をもつものとして評価を与えたこと、第三は、鉄の獲得という物流機構の掌握が国家形成の導引とみなしたことである。かつて東アジアの国家論を取り上げる時、史的唯物論によるウィットフォードの水力社会論に基づいた灌漑農耕社会の諸矛盾の調整機構として現出する専制君主の存在を解釈の前提としていた。後述するように巨大な封土や豊富な副葬品を持ち、特定個人のために築かれた厚葬墓こそが国家成立の物質的な証拠とみなされたこともあった。^④かわって現在では、視点の転換が進展し、東アジア世界を有機的に関連するシステムと見なし、中心―周辺関係のダイナミズムによって威信財交換を評価する視点が注目されてきた。^⑤すなわち、威信を保持するための財の不断の生産―消費のサイクルを再生産することが、古墳築造を反復的に維持する背景となってきたことを、本稿ではまず指摘しておきたい。

元来、社会人類学での交換論の出発点は、モース『贈与論』における贈与と返済の義務への注目であり、この互酬制の原理と規範に則って、サーリンズは一般的・均衡的・否定的の三つの互酬制の類型を挙げている。^⑥次にポランニーは、互酬と再分配といった交換モードの類型を纏め、ワイナールにあっては不可譲の富を指摘した。^⑦これらによって市場経済に対比されるべき経済システムとしての贈与経済が提唱され、互酬制の規範が強く作用する社会に対しては、交換財の非対称

性と不均衡性とは、交換行為に関わる当事者間の関係を強く規定する制度が注目されるようになってきた。すなわち、贈与経済の一種の類型である威信財経済においては、互酬制の規範が過剰な形でシステムとして社会に埋め込まれていることが再認識され、それが厚葬墓すなわち王墓という舞台で威信財を大規模に、かつ反復的に消費するという、人類史における、一見すると異常現象の解釈として提出されるようになった。

このような弥生―古墳時代が帰属する倭の国家形成過程を分析するための視角とは何だろうか。第一は緊密に連携した東アジア世界では一次国家と二次国家とがあり、それが外交と内政の相互規定によって構造化されるような国際秩序が不断に形成されているという認識である。第二は、中国の帝國的な秩序の強化と弛緩とのリズムによって領域外へと流通する財に、外部威信を組み込むことによって威信財へと変換し、それを過剰で反復的な儀礼と共に消費する威信財経済の発現・展開形態とみる認識である。第三は、威信財が社会の領域を越えて移動する事実によって、社会成員は社会に対する実体化した認識をはじめて持つことができ、それによって中心―周辺関係を構築することができるといった社会構造観である。本稿は、これらの問題提起を受けて、弥生―古墳時代の王権論をより深化させていきたい。

現在の古墳時代の研究は、個別遺物・遺構の経験主義的分析に基づいた文化史的な志向から、社会学や文化人類学から抽出される一般理論を演繹的に外挿した解釈論の展開へと大きくシフトしつつあると考える。その背景には全国的に発掘調査件数が膨大なものとなり個人での把握が不可能となったことの半面で、従来の標式的な古墳の調査成果の再検討と新たな重要古墳の調査結果が提示され、古墳時代像への見直しが厳しく迫られるようになったことがある。一例を挙げると、研究の現状の方向性を一部規定した北條芳隆・村上恭通・溝口孝司による共著^⑩では、古墳時代研究に対する提言として、首長制の成立と公権力生成のプロセスの分析、生産財と威信財の交換行為に着目した権力生成論の再構築、目覚しい成果を挙げている朝鮮半島・中国大陸の考古学的成果を踏まえた方法論の国際化、資料とモデルの相互批判の必要性などを挙げている。すなわち国家形成過程の研究においては、共同体の解体と首長権力の伸長の中で、いかにして公権力が

生み出されるのか、その論理を古墳時代社会の規範に求めることが求められているのだ。

この場合、とりわけ現在まで看過されがちであつた視座は、サーリンズによつて社会の別名とされた神觀念の国家形成過程における位置付けである。前方後円墳を必要とした古墳時代社会では、首長の死という厳然たる事実が社会の再生産のために必要とされていたから、古墳時代初頭には弥生時代以来の永続的な他界観と遺骸の保持が第一に求められた。人類史的な表現で換言するならば、古墳時代社会は首長の死をはじめて能動的に受容した時代であり、そのためには現世の王と来世の王とが協力して社会の平衡性を保持することが求められたとも言えよう。そこで必要とされたのが、王の死後の神格化である。この原理は、さらに神仙思想や北頭位、密封と段築に代表されるような中国葬送思想によつて補強され、共同体成員によつて強固に支持された。つまり、古墳築造という威信財の反復的で競争的な消費行動を継続せしめた理由は、社会成員が王を通して神を見出し、かかる宗教的情動にも似た共同幻想に突き動かされていたからなのだ。古墳時代とは、公権力を創出するために、古墳築造とその儀礼へ共同奉仕することが不可欠とされていた社会なのである。

今村仁司・今村真介らは、このような「死せる王」によつて公権力を生み出すよう構造化された社会を、「第三項排除機能」による「神聖性」の創出と定義しつつ、それを社会構造の歴史的変遷において正しく位置付けている。歴史的觀念としての神聖王権は、首長制と国家のはざまに位置付けられ、私は、日本列島において神聖王権段階を見出すならば弥生・古墳時代に当てたいと考える。「神聖王権」という言葉は使つてはいないものの、かつてフレイザーが『金枝篇』を「森の王」から説き起こした理由も、王権の起源が神聖王権にあることを喝破していたからに相違ない。この定義によると、神聖王権では首長に起源神話による権力統治の正当化が完了して宇宙論的な意味が授けられ、かかる神聖なる犠牲者である（死せる）王は、生と死の境界の場に位置付けられた二重の身体を儀礼の中で消費されることによつて、首長制と国家の間を繋ぐ政体が構成されることになる。私は、この視座を重視しつつ弥生・古墳時代の考古資料から復原される社会構造や觀念を素材として検討することでその普遍性を検証し、史的唯物論から社会論への転換期にある日本の国家形成

論に新しい光を当てることを目指したい。

したがって本稿では、神聖王権のモニュメントとしての王墓である古墳を、歴史的に評価することによって、倭の国家形成過程の変化を位置付けることを目的とする。古墳時代とは、威信財交換を重視する視座から定義するならば、財の消費が政治支配領域の内と外の威信の交換システムにしたがって行われ、古墳を場とした集積と分配によって中心—周辺関係が形成される社会システムと換言することができる。その結果、可触的な要素として古墳の埋葬施設や副葬品、不可触的な要素として儀礼や禁忌（タブー）など、さらに儀礼執行の場としての古墳の築造、これら三条件が反復的かつ継続的に累積した、歴史的景観の変更などの総体が、社会システムを複合化、累積化させていく。約言するならば、私は、弥生—古墳時代の倭王権から倭国への変化の中に、日本列島における神聖王権から初期国家への移行過程の、文明の中心地ではなく文明交流圏^⑩あるいは周縁圏としての歴史的な特質が埋め込まれていると考えている。

① 濱田耕作「日本の古墳について」（『東亜考古学研究』萩原星文館）

一九四三

一例をあげるならば、この四八一頁にて、濱田はデニスの言葉を引いて「歴史の沈黙せよという墳墓を語る」という印象的な表現を使用している^⑪。（G. Dennis, *The Cities and Cemeteries of Etruria*, London, John Murray 1883）

② V. G. Childe, *The Urban Revolution, Town Planning Review*, Planning vol. 2, 1950 P1-17

③ 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱——」（『日本史研究』三四三、日本史研究会）一九九一

④ カール・ウィットフォールゲル（アジア経済研究所訳）『東洋の専制主義——全体主義権力の比較研究——』論争社 一九六一

⑤ 国家形成と巨大な墳墓もしくは葬祭記念物との関連性については、よく分かっている。葬送儀礼が社会の直接的に反映するのには、

についても、プロセス学派とポスト・プロセス学派の間で論争があって、法的な回答は控えられる傾向だが、未解決のまま置かれているのが現状であろう。

佐々木憲一「アメリカ考古学と日本考古学——その協調の可能性——」（『考古学研究』第三七巻第三号 考古学研究会・考古学研究会編集委員会）一九九一

⑥ 福永伸哉「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」（『考古学研究』第四六巻第一号 考古学研究会・考古学研究会編集委員会）一九九九

⑦ マルセル・モース（有地亭・伊藤昌司・山口俊夫訳）『贈与論——太古の社会における交換の諸類型と契機』（『社会学と人類学』I 弘文堂）一九八〇

⑧ マーシャル・サリンス（山内昶訳）『石器時代の経済学』法政大学出版 一九八四

⑨ カール・ポランニイ（玉野井芳郎ほか訳）『経済の文明史』筑摩書

房 一九七五

- ⑩ Annette B. Weiner, *Inalienable Wealth, American Ethnologist*, Vol. 12, No. 2, American Ethnological Society 1985, pp. 210-227.
- ⑪ 穴沢味光「世界の中の日本古墳文化」(『江上波夫先生米寿記念論集 文明学原論』山川出版社) 一九九五
- ⑫ 河野一隆「書評 転換期にある国家形成論 広瀬和雄『前方後円墳 国家』を読んで」(『考古学研究』第五〇巻第三号 考古学研究会・考古学研究会編集委員会) 二〇〇三
- ⑬ たとえば奈良県黒塚古墳、大阪府紫金山古墳、三重県石山古墳、兵庫県行着塚古墳、奈良県ホケノ山古墳、福岡県番塚古墳、稲董二一号墳などが例示されよう。

第二章 王権とモニュメント

まず、モニュメントはどのようにとらえられてきたかを瞥見しておきたい。モニュメント造宮を取り上げる場合には、必然的に人知を超えて付与された神観念の変質に着目する必要があるが、それと社会との関係に注目するならば、古墳と古代都城は格好の素材といえるだろう。まず、石母田正は、『古代貴族の英雄時代』において、古墳を以下のように評価していた^①。

(前略) それは何よりも壮大な古墳の存在が暗示するところである。それはリチャード・ジョインズのつぎの言葉を想起せしめる。「いかにして、運搬されたか驚嘆のほかなき諸種の巨像や膨大な建築材料を動かすにも、ほとんどの人間労働のみを惜しげもなく濫費したのであって……労働者の数とこれらの労苦の集中のみで、この目的を達するに十分であった。……アジアの一君主国における農民以外の人々は、かれら各個の肉体的労苦のほかに提供すべき何者をも有していないのであったが、しかし、かれらの数の多いことがその力となっていた。そしてかかる多数の大衆を指揮命令する権力によって、今日なお、われわれを驚倒させるような

- ⑭ 北條芳隆・村上恭通・溝口孝司『古墳時代像を見なおす 成立過程と社会変革』青木書店 二〇〇〇
- ⑮ メアリ・ダグラス(江河徹・塚本利明他訳)『象徴としての身体 コスモロジーの探求』紀伊国屋書店 一九八三
- ⑯ 今村仁司・今村真介『儀礼のオントロギ』講談社 二〇〇七
- ⑰ ジェームズ・フレイザー(メアリー・ダグラス監修、内田昭一郎・吉岡晶子訳)『図説 金枝篇』東京書籍 一九九四
- ⑱ 広瀬和雄『前方後円墳国家』角川選書 二〇〇三
- ⑲ 小林道憲『文明の交流史観 日本文明のなかの世界文明』ミネルヴァ書房 二〇〇六

遺物を与えた諸種の宮殿や神殿やピラミッドや巨像などが造り出されたのである。……要するに、労苦する労働者がそれによって生きる生活収入が一、二少数者の手に集中されていたという事実こそ、かような大企業を可能にしたところのものである」。その壮大さにおいて古代東方諸国の記念物に劣らないわれわれの古代の古墳も、右と同じ過程と機構を通じて築かれたとすれば、これから豪族の社会組織には英雄時代的なものと対立するもの、すなわち独立自営農民ではあっても、政治的にはまったく豪族に隷属して膨大な徭役労働を提供したところの農民層を前提としなければならないのである。（後略）

すなわち、古墳築造とは豪族に隷属する農民達の莫大な労働奉仕によつてのみ可能であり、専制君主が多数の大衆に指揮命令するアジア的生産様式の産物と位置付けられてきた。ところが、莫大な威信財を消費する王墓はアジア世界のみで見られるものではなく、新旧大陸に広汎に分布する人類史的な遺産であることがここでは強く認識されていない。また史料にも、このようなモニュメント造営に専制君主が大衆を強制労働させた証拠は無い。逆に、民族誌的事実から類推するならば、神格化された王に奉仕することが社会成員にとって肉体的労苦を払ってでも見返りがあるものと考えられてきた可能性が高い。その証拠として、モニュメント造営と神観念の関係をうかがわせる象徴的な記述が、奈良県箸墓古墳と藤原宮造営にある。両者には若干の差違がうかがえるけれども、簡単に言及しておこう。

まず箸墓古墳とは、奈良県桜井市に所在する全長二八〇mの前方後円墳であり、三世紀中葉に築造された最初の巨大前方後円墳であることに言を俟たない。『日本書紀』崇神紀十年九月によると

是の後に、倭迹迹日百襲姬命、大物主神の妻と爲る。然れども其の神常に晝は見えずして、夜のみ來す。（中略）爰に倭迹迹姬命仰ぎ見て、悔いて急居。急居、此をば菟岐子と云ふ。則ち箸に陰を撞きて薨りましぬ。乃ち大市に葬りまつる。故、時人、其の墓を號けて、箸墓と謂ふ。是の墓は、日は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて、手遞傳にして運ぶ。時人歌して曰はく、

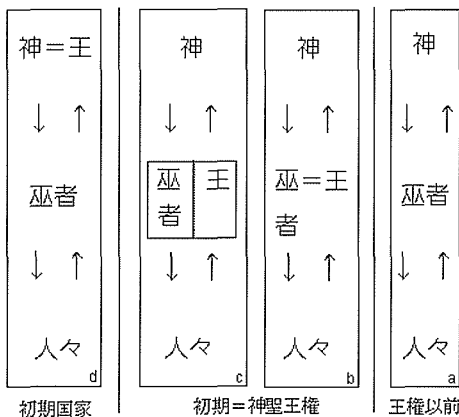
大坂に繼ぎ登れる石群を手遞傳に越さは越しかてむかも

つまり、古墳造営は人と神との共同作業であり、古墳の被葬者は神ではなく神と人とを繋ぐ巫者的な存在であったのだ。しかし、『万葉集』に記された「藤原宮役民作歌」の場合は、若干異なっている^②。

やすみしし わが大君 高照らす 日の皇子 あら妙の 藤原がうへに 食す国を めし賜はむと みあからは 高知らさむと
 神ながら 念ほすなへに 天地も よりてあれこそ 磐ばしる 淡海の国の 衣手の 田上山の 真木さく 檜のつまでを もの
 のふの 八十氏河に 玉藻なす 浮かべ流せれ そを取ると さわぐ御民も 家忘れ 身もたなしらし 鴨じもの 水に浮きゐ
 て わが作る 日の御門に 知らぬ国 よし巨勢道より わが国は 常世にならむ 図負へる くすしき亀も 新たな代と 泉の河
 に 持ちこせる 真木のつまでを 百足らず いかに作り のほすらむ いそはく見れば 神ながらならし

つまり、ここでは大君は神と同一視されており、王権の神格化が古墳時代よりも一層、進んでいることが分かる。もちろん、箸墓築造記事は記紀編纂時に採取された伝承だから、史実をどれだけ反映したかは検討を要するけれども、古墳と都城とについて、若干の差はあれ社会の神観念との関係において、本質が理解されねばならないことをこれらの史料は物語っているのである。

王権と神観念の関係は、歴史学のみならず古代文学の研究でも無視し得ない問題である。たとえば工藤隆は、古事記をアジアの諸民族から採集した神話や歌垣の分析に基づいて、口承伝承から紀伝体の歴史が成立するまでの変遷を八段階に整理しつつ、王・神・人の供犠と贈与のダイナミズムが歴史を生み出すまでの過程を描き出した^③。これにならって、社会の存在理由を象徴的に説明するための観念的実在である神観念と、王およびその依代となる人物（巫者）、社会成員（人）との関係を整理すると次のように



第1図 王と神の関係の進化模式図
 （工藤2003（註③書）を一部改変）

なるだろう（第一図）。

- a. 王権成立以前は王がおらず、巫者が神と人とを仲介している
 - b. 王権の初期には王が巫者を兼ねている。
 - c. 次段階の王権では王と巫者とは機能が分化し、神との交流が職掌化されている。
 - d. 王が神格化されて、神と同一視される。
- 箸墓はcに該当し、藤原宮はdである。もちろん、aからdは発展段階として必ず経過せねばならないものではないが、古墳と都城とはモニュメントに埋め込まれた神・王・人の関係性に変化が生じていることを、まず、ここでは確認するだけで十分である。

- ① 石母田正「古代貴族の英雄時代」（『石母田正著作集』第一〇巻 岩波書店）一九八九
- ② 内山 進「古代日本における「祥瑞」——万葉集の藤原宮役民歌の場合」（『東アジア日本語教育・日本文化研究』九 東アジア日本語教育・日本文化研究学会 二〇〇六）
- ③ 工藤 隆「日本 神話と歌の国家」勉誠出版 二〇〇三

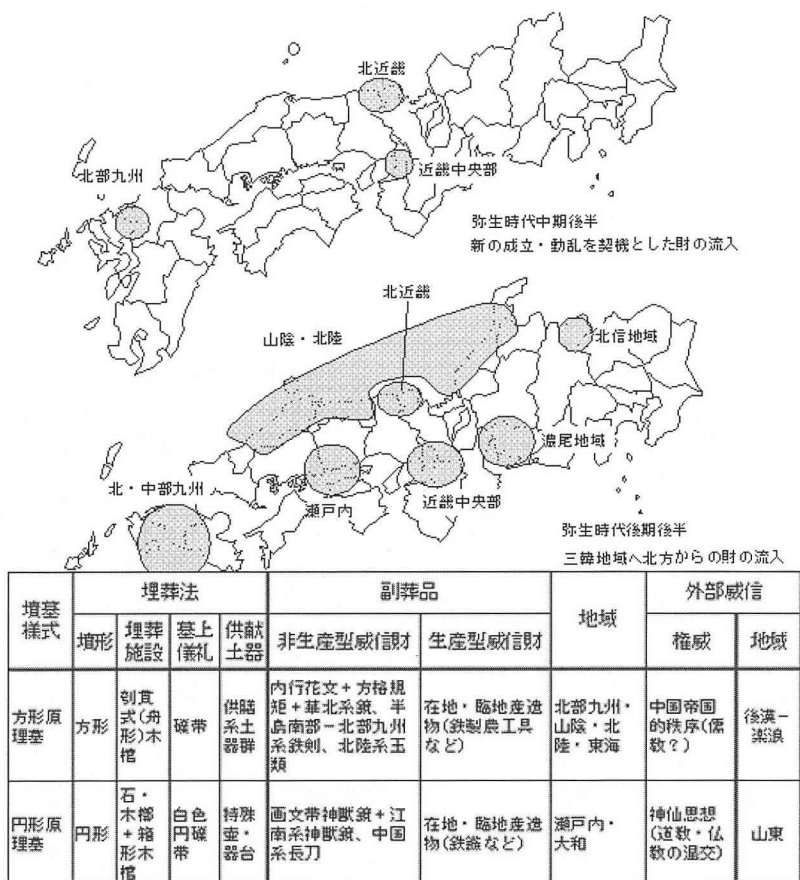
第三章 前方後円墳の登場と時空間座標の再編

一 出現 前夜

前方後円墳の出現以前、弥生時代における墓や副装品に表出された有力集団墓地の成立は弥生時代前期末の北部九州にある。細形銅剣などの武器形銅器や多鈕細文鏡を副葬した福岡県吉武高木遺跡がその一例であるが、首長墓系譜が構成され、かつ広域的な展開を見せるのは弥生時代中期後半になってからとなる。本稿ではこれを、社会が神聖王権の段階に入ったことの証左とみ、弥生王墓と名付けておきたい。弥生王墓の例としては、福岡県三雲南小路遺跡・同須玖岡本遺

跡・大阪府加美遺跡Y—一号墓などが挙げられよう。この背景には、紀元前後の新しい漢王権簞奪とそれに伴う動乱を契機とした過剰な財がそれまでのコントロールを喪失して朝鮮半島や日本列島各地域に不均質に流入したことがある。財の不均等な蓄積を契機とする社会の不均衡性の崩壊を防ぐためには、それらを威信財として位置付け、消費して公共性を創出されねばならなかったのだ。このために、広い後背生産基盤を持つ北部九州と近畿に、社会の犠牲者としての王（「神聖王」）が擁立されたとは私は考える。しかし、近畿においては弥生後期初頭には自然環境の激変と後漢王朝を後ろ盾とする流入した威信財のコントロールが再開され、弥生後期前半には社会の均衡性が再び獲得されたために、王墓築造の展開は目立たなくなる。この一方で、北部九州では奴国域の福岡県須玖岡本遺跡や同須玖坂本遺跡などで青銅器やガラス生産などが、北近畿でも京都府奈良岡遺跡などにおいて、玉作りなどの初期威信財生産が継続していた。これらの地域では、少量の王権の領域内では生産できずに輸入した威信財（＝非生産型威信財）と生産型威信財によって副葬品組成を構成する王墓が、後期前半においても福岡県井原鎧溝遺跡や京都府三坂神社墳墓群などで連綿と築造され続けている。

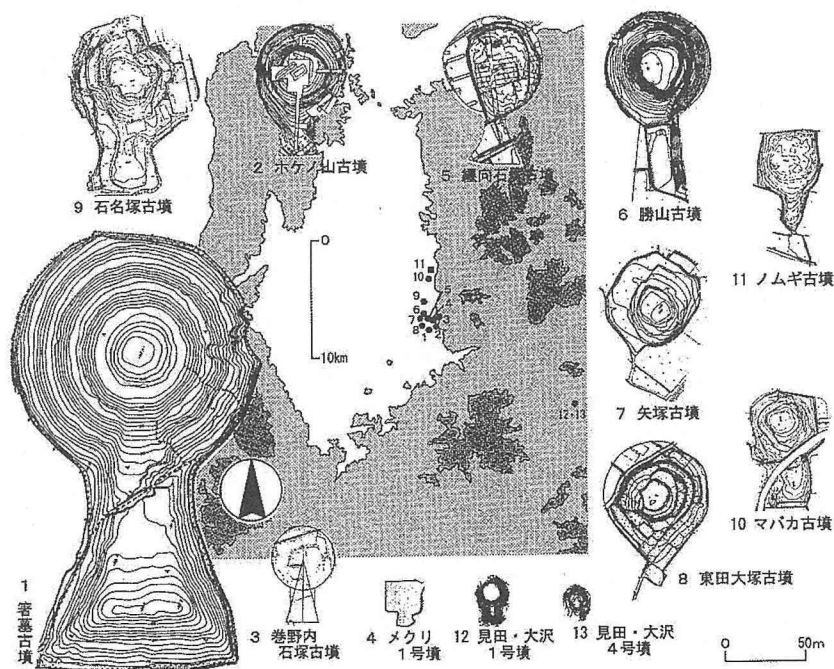
弥生後期後半になると、北東アジアから朝鮮半島への過剰な財の流入が再開し、厚葬墓の継続的な造営が可能となる。朝鮮半島の原三国時代の初頭に属する昌原茶戸里墳墓群がその嚆矢であり、金海良洞里墳墓群や大成洞墳墓群・釜山老圃洞墳墓群・慶州朝陽洞墳墓群などに厚葬墓が見られるようになる。日本列島へも玉突きの影響は波及して、一定の幅をもった線形的かつ広汎に王墓の築造が認められるようになる。その地域は、北部九州と日本海岸、北近畿、瀬戸内東部、近畿・濃尾平野を拠点とした帯状である（第二図）。すなわち、弥生後期後半においてはこの一連の帯を主軸として威信財の流通ネットワークが形成され、厚葬墓が伝播・展開するのである。この厚葬墓の様式とは、日本海沿岸と東海を中心に分布する方形原理弥生墓様式と、瀬戸内沿岸・東海に分布する円形原理弥生墓様式とに大きく二分される。これらは、墳墓の外形の差違だけに止まらず、徐々に副葬品においても質的な差が認められることが分かってきており、様式差として見なすことができるものだ^②。



第2図 弥生時代の王墓にみる地域間関係

二 前方後円墳の発生

古墳前期初頭（三世紀中葉）には、大和盆地東南部に最初の前方後円墳が発生する。この中には、前方部が伸張した箸墓類型の前方後円墳と短小な纏向型前方後円墳の二者があり、奈良県ホケノ山古墳の調査によって、両者の埋葬様式の差違がかなり明確化してきた（第三図）。この時期の前方後円墳の研究成果によると、前方後円墳は段築・長大な竪穴式石槨・割竹形木棺・葺石と埴輪などを持ち、定型化した形で発生することが明らかになってきた。^④この日本列島の王墓である前方後円墳は、墳丘・埋葬施設・副装品に各々、比較考古学的な視点からの特質が指摘できる。まず墳丘では、墳丘築造が埋葬施設造営に先行し、墳丘設計図が他の古墳と共有される点である。^⑤つまり大王と諸王との間で墳丘型式の共有があり、旧大陸の王墓のように王の中の王のみが特別な埋葬様式を保持し



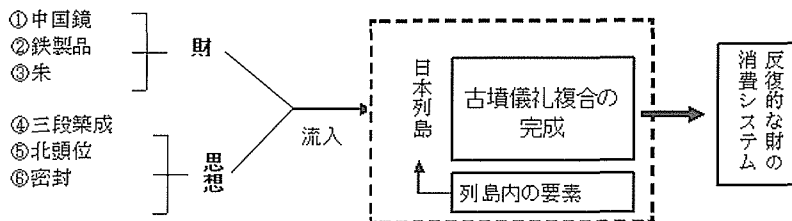
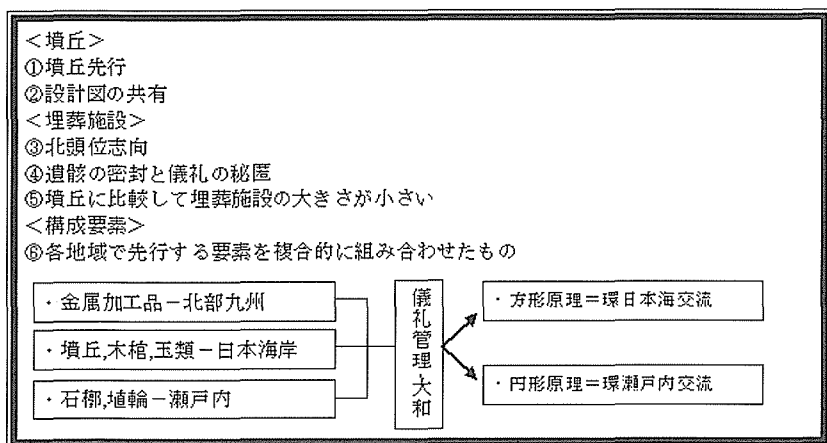
第3図 奈良盆地の発生期の前方後円墳

（橋本輝彦「出現期前方後円墳に見る大和と瀬戸内」（『日本考古学協会愛媛大会資料』日本考古学協会）2006より）

ているわけでは無い。次に埋葬施設においては、北頭位を志向し、遺骸は埋葬施設の中で密閉され、埋葬儀礼は儀礼に参加できる人数が制限された聖域となる点である。^⑥これは弥生墓からの伝統であったものが、前方後円墳の登場と共に様式化された儀礼としていつそう過剰になったものと位置付けられるだろう。副葬品では、古墳出現前夜の各地域で先行した要素を組み合わせ、新しい埋葬様式に統合される点である（第四図）。これら、従前の葬制が再構成された結果として新しく創出された古墳の儀礼は、弥生墓で見られた方形原理および円形原理の地域へと覆いかぶさる形で全国へ波及していき、列島各地の地域性が払拭されることとなる。

三 前方後円墳の全国波及

古墳前期後半には、大和で完成した大型前方後円墳が全国各地へと日本海岸・瀬戸内・東海および東山道ルートに沿って伝播していく。たとえば、

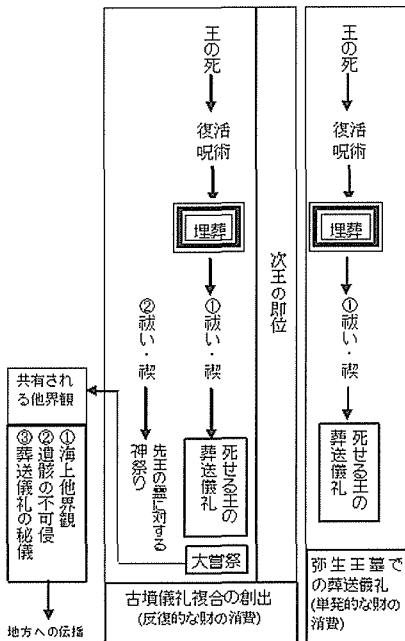


第4図 前方後円墳の成立にみる地域間および対外関係

丹後半島の京都府網野銚子山古墳や西濃地域の岐阜県矢道長塚古墳・昼飯大塚古墳、下総の千葉県手塚古墳などに、いわゆる「畿内型古墳」が登場するのもこの時期のことである。この全国波及によって弥生墓と前方後円墳の儀礼の質的な隔絶性が明確となった。まず、弥生墓においては、中国からの財・思想を列島内の要素と複合することで、国内に流入する外部威信の表象である財を反復的に消費する社会的なシステムを創り上げていた。これは、円形原理と方形原理といった弥生墓の地域間ネットワークを土台としたが、それ以上に死生観の革新が背景にはあったと考える。

弥生王墓では、王の死後、その復活を試みたことがあったとしても、その後に埋葬され、祓い・禊などが行なわれて終了する一連の流れがあった。しかし、古墳の儀礼では、それを次王による大嘗祭儀礼として変質させた。さらに、数次にわたり埋葬後にも継続して墓前儀礼が次王によって、その後も祓いと禊とが継続的に行われるといった差違が認められる（第五図）。この背景には、何人も王の遺骸を侵してはならず、葬送儀礼は社会成員の大部分の目から隠された形で行われ

なければならぬという、弥生王墓以来の王の遺骸の不可侵の原則^⑦があった。なぜならば、王は死後に古墳を入り口とする海上他界へ姿形を保ったまま、死出の旅路に就かなければならなかったからであり、このためにも遺骸の毀損は極力避けられねばならなかったのだ。後述するように、古墳時代中期後半の畿内系横穴式石室の導入によってこの観念は否定されるけれども、北部九州の弥生時代の甕棺墓から継承されたこの他界観は、前期古墳でも南海産貝輪・腕輪形石製品などの形で継承され、さらに北部九州では福岡県珍敷塚古墳



第5図 埋葬儀礼の過程と機能の変化

や熊本県丹波ヶ穴古墳などの装飾古墳モチーフなどにも痕跡として残存することになる。

四 神聖王権としての古墳時代社会モデル

さて、弥生→古墳時代を王墓の成立と変質とを鍵として見た時には、考古学的諸要素の諸要素の消長に基づくのとは別の時代認識に基づいた区分原理を議論することも無駄ではあるまい。元来、過去には古墳時代は二期区分か三期区分か論争をみた経緯があり、古墳文化を实体としての社会の文化と同一視する三期区分（前・中・後期）に落ち着いた。しかし、前方後円墳の消長よりも厚葬された特定個人墓の登場から消滅の方が、より包括的な歴史的過程を持っていると私は考える。以前、日本列島に弥生王墓が登場する弥生中期後半から前方後円墳発生までを初期王権、前方後円墳発生から畿内系横穴式石室が登場するまでを「盛期王権」、畿内系横穴式石室が列島に波及して古墳の規模縮小に拍車がかかってくる時期を「末期王権」と区分することを提唱し、初期・盛期王権を「倭王権」、末期王権を「倭国」として、末期王権段階こそがクラッセンおよびスカルニックが提唱した「初期国家」概念の特徴と合致することを提唱したことがある（第六図）。王権が萌芽する初期王権では富の破壊のために共同体首長が選別されたが、前方後円墳の発生以降には、神と交流し、財を反復的に消費するための社会システムとして、神聖王権的な社会組織が一層強まることとなったのだ。この段階の社会構造は、支配共同体と農業共同体とに分離され、支配共同体と農業共同体との間は再分配構造によって財の物流構造が確保される。王と神観念および巫者との関係に基づいて王権の形成との対応を図式的にまとめたみたい。

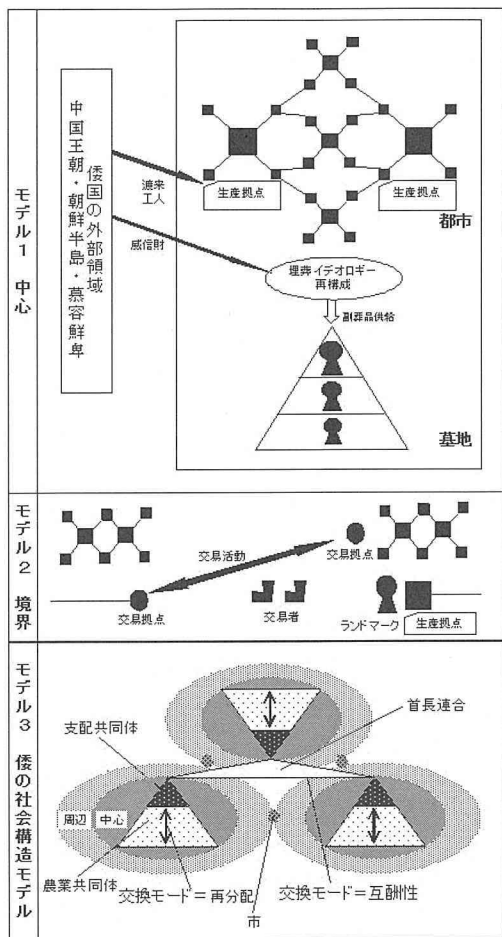
まず、王が巫者を兼ねている段階としての初期王権は弥生中期後半の弥生王墓から発生期の前方後円墳までが該当する。この段階で王墓の被葬者は非生産型威信財の消費を目的として社会から選別（聖別）された犠牲者として位置付けられている。これは、特定個人墓として共同墓地から飛び出さない事例から、共同体首長が兼ねることも多かったと想像される。

年代		B.C. A.D.												
		100		200		300		400		500		600		
中国王朝		新	後漢			魏・呉・蜀	西晋	五胡十六国		北魏		隋		
								東晋	宋	南齊	梁	陳		
朝鮮半島		高句麗 百濟 新羅 加耶												
王権の区分		初期王権					盛期王権					末期王権		
経済システム		威信財経済										再分配経済		
神聖王	王	瀬戸内東部 大和東南部 大和北部 和泉北部 (百舌鳥)										三島(継体)		
	墓	大和北部												
	威信財	生産型	画文帯神獸鏡					三角縁神獸鏡 画文帯神獸鏡ほか						
		非生産型						腕飾類 帯金具など						
	イデオロギー							魏・晋王朝		南朝				
世俗王	王	北部九州 山陰・近畿北部・北陸西部					大和西南部 河内中部(古市)							
	墓													
	威信財	生産型	内行花文鏡・方格規矩鏡など											
		非生産型	青銅器・ガラス製品					仿製鏡 甲冑						
イデオロギー		漢王朝・楽浪＝在地首長ネットワーク												

第6図 倭王権の構造

つづいて、盛期王権の段階では、王と巫者とが機能分化して神との交流が職掌化され、結果的に儀礼は様式化し、全国的に波及するものとなった。これが多くの前方後円墳（＝首長墓）系列を生み出した背景であり、それを表象した他界観が広域的に共有された。この盛期王権段階では、後述するように生産拠点内部で渡来工人が主導した副葬品生産が実施される（第七図モデル1）。と同時に階層的に再分配される生産型威信財は、埋葬イデオロギーの変質をもたらした。また、九州南部や東北南部などの非古墳文化との間には、接触領域が形成されて交易拠点が登場し、交易（仲介）者が存

在するようになる（第七図モデル2）。また、そこには巨大な前方後円墳が境界のランドマークとして築造されるようになる。このような境界の誕生も、古代国家へと継承される領域支配の前提が据えられたことを意味している（第七図）。



第7図 古墳時代の社会モデル

- ① 生産型威信財と非生産型威信財の定義については、河野一隆「副葬品生産流通システム論——付威信財消費型経済システムの提唱」〔中期古墳の展開と変革——五世紀における政治的・社会的変化の具体相（一）〕第四四回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会 一九九八
- ② 河野一隆「クニの誕生——畿内の政体分析の構造分析から見た倭王

- 権の変遷過程」〔三世紀のクニグニ〕考古学研究会岡山例会第五回シンポジウム、考古学研究会 二〇〇〇
- ③ 北條芳隆「前方後円墳と倭王権」（北條芳隆・村上恭通・溝口孝司『古墳時代像を見なおす 成立過程と社会変革』青木書店 二〇〇〇）
- ④ 近藤義郎「前方後円墳の時代」岩波書店 一九八五
- ⑤ 岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」〔考古学研究〕第三九卷第

二号 考古学研究会・考古学研究会編集委員会）一九九二

- ⑥ これは複次葬を可能とする埋葬施設の採用と密接に関連すると考えられる。福岡県平原一号墓・島根県西谷三号墓では埋葬施設の上部に建物跡が検出され、埋葬に先立って殯のような埋葬前儀礼が実施された可能性が指摘されている。竖穴系埋葬施設を採用する前期古墳でも、埋葬施設の周囲に方形埴輪列が囲み、かつ埋葬後には被葬者の姿形を目にすることは不可能になるという構造となる。しかし、横穴式石室が導入された以後には、会葬者は墓室に入るたびに先行する被葬者を視認することができ、世代を越えた儀礼が可能となる。したがって、結果的には、横穴系埋葬施設よりも埋葬儀礼参加者の数は、竖穴系埋葬施設に比べると限定されることになる。

⑦ 橋口達也『墓棺と弥生時代年代論』雄山閣 二〇〇五

この中で、墓棺の採用の背景には遺骸のより良い保持を行ない、再生

第四章 古墳時代の内的・外的な交流

財の移動の基盤となっている交流の様態についてみると、古墳時代の交流には、対中国交流と、対朝鮮半島交流の二者がある。古墳時代の対朝鮮半島交流には、朝鮮半島西海岸と東南部から対馬・杵岐（海北道中）を経て博多湾へと到達するルートおよび、沿海州や朝鮮半島北東部から直接日本海岸へと到達するルートとがある。さらに前者は白井克也が提唱した靑島貿易・原ノ辻貿易・博多湾貿易の貿易拠点の変遷^①があり、久住猛雄が分析を深化させたように、古墳時代前半には博多湾沿岸が物資の集積地であり、交易拠点として整備されたことがかなり明らかとなってきた。一方、古墳副葬品からは朝鮮半島との交渉に迫る研究も進められてきた。大和北部の佐紀盾列古墳群の台頭と軌を一にするように副葬品における鉄製品の比重が高まり、その背景には金官加耶を窓口とした畿内内部の政権交代を想定する見解もある。さらに、

を願う観念があった可能性が述べられている（三一頁）。

- ⑧ 古墳時代に海上他界観が存在していたらしいことは、辰巳和弘『古墳の思想——象徴のアルケオロジ』（白水社 二〇〇二）に詳述されている。その根拠は、舟葬遺構と貝輪ならびに腕輪形石製品の副葬であり、その系譜は弥生時代の甕棺墓に南海産貝輪が副葬されている事実を求めることができるだろう。また、福岡県沖ノ島、三重県神島などの古墳時代の島の祭祀遺跡の登場も、海上他界観が残存していたことを物語っている。

⑨ 河野一隆「刺激伝播と国際秩序——倭王権形成過程二つの画期——」（『考古学研究』第四八巻第二号 考古学研究会）二〇〇一

⑩ 河野一隆「倭王権の領域構造」（『京都大学人文科学研究所編『国家形成の比較研究』学生社）二〇〇五

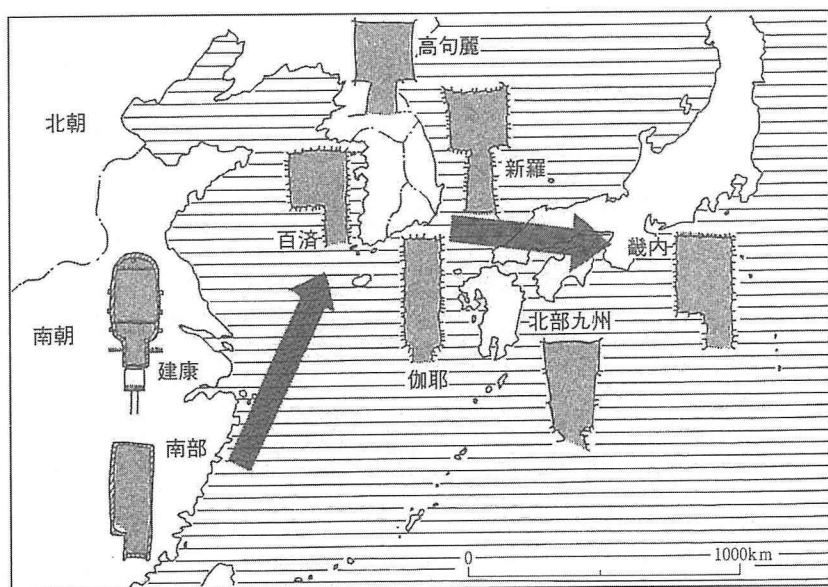
金官加耶滅亡後の五世紀にあつては、日本列島側の古市・百舌鳥古墳群の造営主体および吉備や日本海岸諸地域と、朝鮮半島側の大加耶を中心とする加耶連合諸国、この両者間での密接な対外交渉ルートが確立され、日本列島側にとつては六世紀には対百済交渉へとシフトすることも指摘^④されている。

他方、古墳時代の中国交流を示すものは、弥生時代から継続する鏡の副葬は言うまでもない。前方後円墳の発生に伴い、定期的に中国へと朝貢して冊封を受け、鏡が威信財として日本列島各地へ配布・副葬された事実は社会の複雑化が一層進展したことを物語っている。しかし、古墳時代前期半ば以降になると奈良県新山古墳や兵庫県行者塚古墳などで副葬された西晋製の龍文透彫帯金具や、中期中葉以降に副葬が顕著となる神人画像鏡や画文帯同向式神獸鏡^⑥および、大阪府高井田山古墳や福岡県塚堂古墳などで見られた火熨斗など、対朝鮮半島交渉と比較しても部分的なものに止まっている。さらに、入手の背景は中国の特定地域との交易だったのか、中国王朝と倭王朝との王朝間の関係だったのかをも議論するためには、さらなる資料の増加も必要である。ただし予察を述べるなら、横穴式石室の系譜論の深化にともなつて、古墳時代中期末以降、畿内型石室として波及することになる右片袖石室は百済を経由してまず畿内に影響を与えているが、その源流は南朝（中国）南部に求められる（第八図）可能性^⑦がある。さらに、これと系譜的に異なつた構造を持つ九州系横穴式石室は、直接的な源流が長らく不明であつた。近年、和田晴吾は近畿の「閉じられた棺」とは対照的な、九州の「開かれた棺」が北魏の棺床墓と共通することを指摘しつつ、北朝から高句麗を経由して北部九州に「開かれた棺」の觀念が影響を与えたことを指摘^⑧する。ここで想定された、「南朝―百済―畿内」と「北朝―高句麗―九州」という基層的な二つの地域軸は、東アジア（極東文明）の長期持続的な史観を拓くものと私は考えている。すでに古墳時代における北朝系文物の流入については、桃崎祐輔が指摘するところでもあつた^⑨が、埋葬施設と副葬品とを繋ぐ整合的な理論構築と地域間関係の評価が今後、求められるだろう。

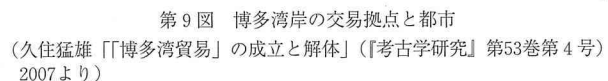
古墳時代の交易拠点とは、対外的な窓口と国内の沿岸交流の拠点とに分けて考える必要がある。現在、対外交渉の窓口と

して重要視されている地域は博多湾（第九図）と河内潟（第一〇図）であり、国内地域に繋がるネットワークの結節点と重なっている。たとえば、博多湾では交易的機能の強い港湾機能を兼ねた都市（前原市潤地頭給遺跡・福岡市今宿五郎江遺跡・同西新町遺跡・同博多遺跡群）と政治的機能の強い都市（前原市三雲遺跡・福岡市比恵那珂遺跡群）とがある。一方、後者においてはそれぞれ渡来人が集住した難波と飛鳥とが、交易的機能、政治的機能を分担し、都市的な景観が各々に構成されていた。これは、後の複都制というほど、整備されたあり方とは言えないけれども、古墳時代中期には後の畿内制に先行するような生産―消費の拠点が密接に連携する地域構造が萌芽して、弥生時代のような集約性の高い衛星的ネットワークから機能分化が進んだ都市構造への移行が始まっていたと私は考える。また、須恵器や玉作りなどの専門的な手工業生産が付随している点からみても、政治・経済的な地域間分業によって集約性を高める地域構造は、すでに古墳時代中期には確立された形で現出していたのであろう。^⑪

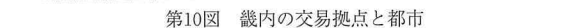
一方、国内交通の拠点（いわゆる市）の実体については、



第8図 中国南朝との交流



(久住猛雄「『博多湾貿易』の成立と解体」(『考古学研究』第53巻第4号) 2007より)



分らない点が多すぎる。古くから森浩一が日本海岸の古墳分布が地勢的に潟湖の部分に見られる点を重視して、沿岸の港を繋ぐ交易ネットワークを想定したことがあったし、西濃や上毛野では東山道交通の要衝に古墳が築造されていることも、古くから注意されてきた。律令制下の交通路整備を視野に入れた古墳時代の交通路研究は未だ緒に就いたばかりといわざるを得ない。

- ① 白井克也「勒島貿易と原の辻貿易」粘土帯土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易——（『第四九回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の交易——モノの動きとその担い手——』埋蔵文化財研究会 第四九回研究会実行委員会）二〇〇一
- ② 久住猛雄「『博多湾貿易』の成立と解体」（『考古学研究』第五三巻 第四号）二〇〇七
- ③ 福永伸哉「三角縁神獣鏡の研究」大阪大学出版会 二〇〇五
- ④ 高橋克壽「金工技術からみた倭王権と古代東アジア」平成一六一八年度科学研究費補助金（基盤研究）成果報告書 二〇〇七
- ⑤ 車崎正彦「年号鏡その他——古墳出現年私考の控え」（『日韓古墳時代の年代観』国立歴史民俗博物館・韓国国立釜山大学校博物館）二〇〇六
- ⑥ 小林行雄「倭の五王の時代」（『日本書紀研究』第二輯）一九六一
- ⑦ 河野一隆「右片袖の思想」（『古代学協会四国支部第九回徳島大会資料』一九九五）
- ⑧ 和田晴吾「東アジアの『開かれた棺』」（『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』）二〇〇七
- ⑨ 桃崎祐輔「日本列島における騎馬文化の受容と拡散——殺馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三国伽耶の影響——」（『渡来文化の受容と展開——五世紀における政治的・社会的変化の具体相（一）——』埋蔵文化財研究会）一九九九
- ⑩ 下垣仁志「倭王権と文物・祭式の流通」（『国家形成の比較研究 京都大学人文科学研究所共同研究報告』学生社）二〇〇五
- ⑪ 花田勝弘「倭政権と鍛冶工房」（『考古学研究』第三六巻第三号）一九八九
- ⑫ 森 浩一「古代の日本海諸地域——その文化と交流」小学館 一九八四
- ⑬ 赤塚次郎「野の国縁起」（『花園史学』第八号）一九八七

第五章 古墳時代中期の大変革

古墳時代中期（五世紀）には、渡来人による威信財・必需品生産の大きな変革期であったことは強調するまでもない。その内容を纏めるなら、渡来系技術の導入による高加熱制御技術（甕窯焼成・甕の普及）および金工技術（熱間および冷間鍛造）の普及による生産型威信財の多元的な生産および威信財の階層的保有の革新などが挙げられる。すなわち、従来まで、

非生産型威信財の消費のために築かれていた王墓の手段と目的とが逆転し、威信財を安全に消費し尽くす（＝破壊する）ための古墳築造ではなく、古墳築造のために威信財が生産・供給されるように社会構造が変質したのだ。同時に、古墳の儀礼は参加者が制限される秘儀から、社会成員に公開され、芸能的色彩の強いものへと変貌したらしい。

まず、日本列島に流入する渡来系技術はどのように中心から周辺へと波及していくのだろうか。古墳時代中期になって倭に受容された渡来系技術は、地域首長への新来の技術の拡散を防ぐために王権麾下の工人集団として再編成される。その渡来系技術者集団は、従来の倭系の生産組織と複合しつつ生産財・威信財を王権で独占的に供給する生産体制を構築していく。この代表例が大阪府の阪南丘陵に展開した陶器古窯址群と鍛冶生産の拠点たる大阪府大県遺跡、葛城氏の膝下工房として推定される奈良県南郷遺跡群などが挙げられよう。これらの生産工房群から地方の生産組織へ技術移植が行われる場合、その移植方法は以下の二点に帰結するようだ。第一は、畿内中枢工房から技術指導者が派遣され、畿内と地方の政治的関係を更新し、それ以前までの首長墓系譜の変革や断絶をもたらすものとなったことだ。たとえば、東海から東海道沿いに波及していく埴輪・須恵器兼葉窯などがその一例であり、古墳時代中期後半における三河・遠江の首長墓興隆の一因ともなった。第二は、新来の技術を修得し、日本列島各地に波及させるための後代の上番制と共通するような技術修得（技術研修）システムである。その代表例が、斐田哲郎が早くに指摘した陶器古窯址群における状況であり、窯趾の小支群で継承される須恵器端部処理のくせや製作技法や特徴が、地方窯の特徴としても継承されるといった事実からうかがえよう。^①すなわち、畿内における技術の習得関係が地方においても、長らく継承されることを示している。

これら以外に、重要な変革は死生観の変質だ。古墳時代中期中葉以降には、「王賜」銘などのように大王名を銘記して下賜される銘文刀剣が登場する。これは、この時期以降に氏族制度が整備されて、他界での戸籍（タテ系譜）を擬制的な同祖・同族系譜に読みかえて器物に銘示して下賜し、後世へと伝える意図が芽生えていたことがうかがえる。つまり、王権は現世以上に来世の直接的支配にもこの時期に乗り出したのである（第一一図）。この同祖同族的結合の再確認の場とし

て導入されたのが、五世紀末頃に畿内に導入され、六世紀以降に爆発的に群集墳に採用された畿内系横穴式石室である。この歴史的意義は、以下の二点に要約することができる。

第一は、埋葬儀礼の人々への開放である。古墳時代初頭以来の秘儀としての姿を古墳時代中期以降に失った、古墳の儀礼は、現首長に至るまでの首長系譜を後世まで来世のタテ系譜に再編して伝えていくべきことが最重要課題となった。このため被葬者の死の確認が大変重要な行為として位置付けられるようになった。畿内系横穴式石室の導入後、京都府八幡女谷横穴群・大分県上ノ原横穴群などでは岩松保^②および田中良之・村上久和らによって被葬者の死の確認行為、すなわち解剖学的な位置関係を意図的に崩して配列された人骨の出土が報告されている。つまり、生者と死者とは截然と不可逆的に分離したものであることが、社会成員に強く認識され、共有されるようになったのだ。これらは、弥生時代以来の海上他界観と遺骸の保持に対する全面否定にはかならない。第二としてタテ系譜の登場は、来世において畿内の大王を神として頂点に君臨させ、そこへの奉仕という形で社会成員全体の供儀が求められるように変質した。すなわち、畿内型横穴式石室の導入まで公共の犠牲者として位置付けられていた古墳被葬者（神聖王）は、古墳時代中期後半以降には社会成員に犠牲的な労働奉仕を強制しつつ古墳築造を反復的に継続させる存在へと意味がひっくり返ったのである。

この大転換を可能とせしめた背景には、死生観と神観念とがそれ以前と大きな断絶を経過したことがある。初期・盛期王権下の被葬者は、死後に海上他界へと旅立ち、神と交通するための、成員の共同作業としての古墳築造が必要とされたのだ。被葬者は神と交通するための仲介者に過ぎなかった。ところが、古墳時代中期末になって古墳の被葬者が、死

古墳前期	儀礼の執行勢力であった畿内
古墳中期前半	渡来系技術者の畿内集住 ↓
	副葬品生産および生産様式革新の主導者
古墳中期後半～末期	古墳儀礼複合が政治的上層下関係を確認する道具へ転化

＜古墳築造のもつ意味の変質＞

①社会成員が王を通して神へ連なるための必要行為

↓

②豪族＝被葬者が神の同祖同族系譜に連なるための行為

第11図 古墳築造の意味の変質

後に神である大王を頂点とする擬制的なタテ系譜へと再編成され、副葬品となる財の生産・供給組織が大きく変わると、現世の政治的序列を死後にも反映する階層となった。古墳の儀礼は秘儀から公衆の面前で定期的に演じられる芸能へと性格を変えていく。^④ ちょうど歌垣から神話が成立して原初的な歴史の成立へと歩みをはじめたように、成熟国家段階以降という歴史の成立に向けて、末期王権からの離陸が徐々に始まっていくのである。

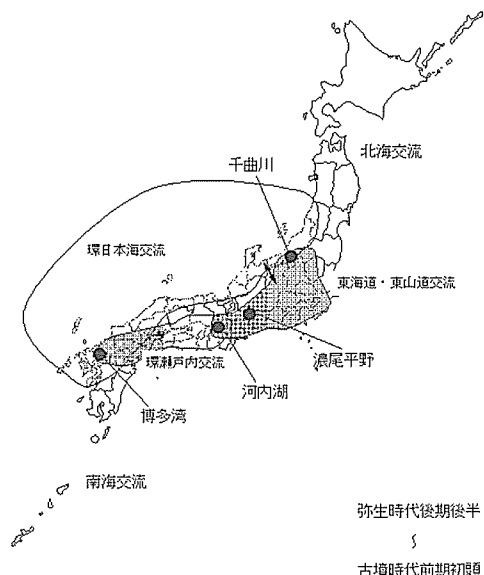
- ① 菱田哲郎「須恵器生産の拡散と工人の動向（第三八回考古学研究会総会研究報告——統一テーマ「技術と集団」——）」（『考古学研究』第三九卷第三号）考古学研究会 一九九二
- ② 岩松 保「黄泉国への儀礼——骨を動かす行為」（『京都府埋蔵文化財論集』第五集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）二〇〇六
- ③ 田中良之・村上久和「墓室内飲食物供献と死の認定」（『九州文化史研究所紀要』第39号 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門）一九九四
- ④ 水野正好「埴輪芸能論」（『古代の日本』二二 角川書店）一九七一
- ⑤ 工藤 隆「古事記の起源——新しい古代像をもとめて」（中公新書 二〇〇六）

第六章 中心—周辺関係の成立

前章までに、日本列島の王墓が、弥生時代以降に過剰に流入する威信財を安全に破壊する装置であり、威信財交易のネットワークについても時代とともに領域を変えて変遷することを述べてきた。この領域内には、他の威信財交換ネットワークと交差するいくつかの結節点を持ち、そこには神聖王を埋葬した弥生王墓や前方後円墳が築かれている。本稿で整理した神聖王権から初期国家の成立に至る三段階から、日本列島の国家形成における中心—周辺関係の成立の問題について言及したい。

一 初期王権段階（第二図 弥生時代後期後半—古墳時代前期初頭）

弥生王墓が登場するこの時期の代表的な地域としては、弥生時代中期後半から継続的に王墓が造営される博多湾岸、前



第12図 初期王権の地域間構造

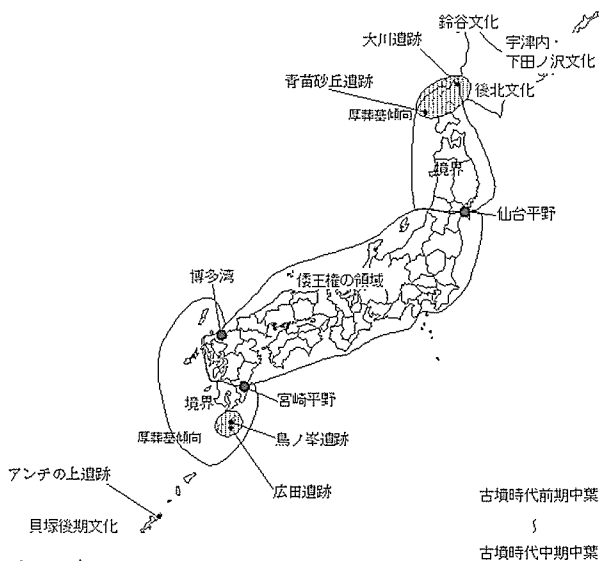
象される外部威信が重視された段階だったのだ。この段階では列島規模での中心—周辺関係が確立しておらず、したがって国土や国境の概念も登場していない。

二 盛期王権段階（第一三図 古墳時代前期前半—古墳時代中期中葉）

仙台平野から宮崎平野にいたるまで、畿内が主導する前方後円墳の築造とそれを舞台とした葬送儀礼が波及したこの時期には、形式化された埋葬法としての前方後円墳が墳形と規模の階層的なネットワークを形成しつつ面的に広がっていく。この段階での中心と周辺との結節点として挙げられるのは仙台平野、宮崎平野、博多湾から対馬にいたる北海道中である^②。

方後円墳が発生した河内湖沿岸から大和盆地にかけての地域、前方後方墳が発生する濃尾平野、北陸經由の日本海文化と東海經由の東山道の要素が交差する千曲川流域などの地域が挙げられる。これらの地域で継続的な特定個人墓の造営と、威信財の副葬を維持できたのは、環日本海地域、環瀬戸内地域、東海地域、東山道地域など沿岸路または交通路に沿って線的に展開した、財の交易ネットワークがその前代から発達していったからに相違ない。しかし、これらの地域のつながりは、交通路に規制された帯状の伝播にすぎず、中心から周辺へと広域に広がっていく段階ではなかった^①。この段階では港湾施設などを拠点として威信財が入手され、再分配は行われていないことから、遠隔地交易によってもたらされた財に表

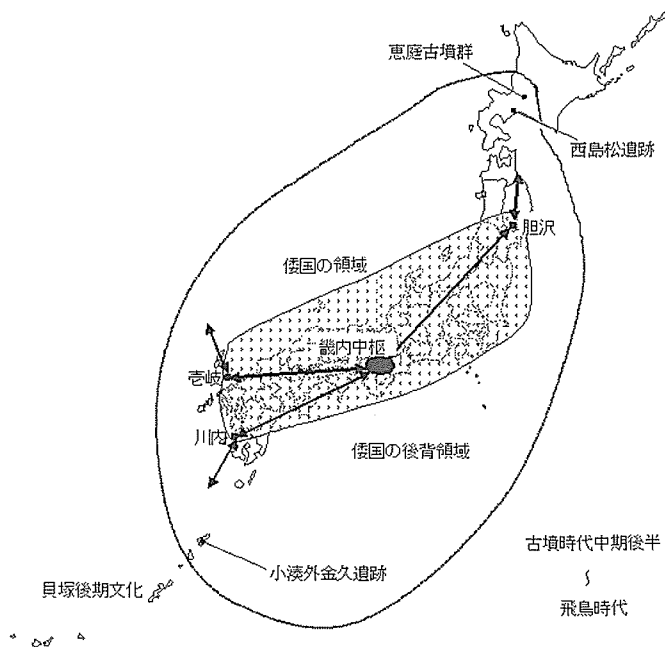
第13図 盛期王権の地域間構造



つて表現するならば、この境界領域とは半周辺に該当するものであり、国家形成期における特徴的な様相と想定したい。

三 末期王權（第一四回）古墳時代中期後半以降

古墳時代中期後半になって、初期国家的な政体が成強め、成熟国家へと継承されるようになる。この段階の国境は、南は川内平野、西は沓岐島、北は北上盆地が該当しよう。それは、厚葬墓を伴った交易拠点である以上に、豪族居館などに渡来系技術者が主導する生産拠点もが付随する。たとえば岩手県中半入遺跡では竈を持つ住居跡が登場し、黒曜石製スクレーパーの多量出土は、続縄文文化との接点で皮革加工が行なわれたことを示している。成熟国家の国境には生産拠点が伴うけれども、その嚆矢が初期国家段階から認められることは重要だ。神聖王権段階における境界では交易的な性格が前面に出ていたが、初期国家段階では国家領域外から天然素材を貢納させ、国境でそれを製品および半製品に加工して、畿内へと集約させるような流通体制が萌芽しつつある。これが、律令制の集権的な政治体制下の物流を支えていくことになる。



第14図 倭国（末期王権）の領域

威信財交換に着目した中心—周辺関係を図式的に概観すると、^④初期王権下の線的ネットワークの結節点から前方後円墳の階層的構成による面的ネットワークが成立し、独自の墓制を持った境界領域が登場する。しかし、末期王権段階では生産手段を中央から再分配された生産拠点が国境に築かれるようになり、成熟国家の成立に向けて経済体制を徐々に形成していくのである。

- ① この典型例として挙げられるのが、弥生中期における方形貼石墓と弥生後期の四隅突出型墳丘墓である。前者は、中国地方の山間部に遡源が求められるが、飛び火的に伝播して丹後地域にもほぼ同時期に出現している。また、後者は日本海岸に主として分布しているが、北近畿地域のみは方形台状墓が主体となり、四隅突出型墳丘墓は見られない。特殊な様式の埋葬様式の採否に当たって、地域の選択の主体性が重視されたと考えることができよう（鳥根県立古代出雲歴史博物館『弥生王墓誕生 出雲に王が誕生したとき』鳥根県立古代出雲歴史博物館物館企画展図録 ハーベスト出版 二〇〇七）。
- ② 九州前方後円墳研究会『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会 二〇〇三
- ③ 律令国家の辺境戦略は、宗教政策と産業政策とが組み合って進められている（菱田哲郎『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会 二〇〇五、二四四—二四八頁）。陸奥国府と推定される郡山遺跡では官衙遺構と付属寺院が検出され、平安時代に出現して津軽平野から北海道まで須恵器を供給した五所川原窯跡群などがその例として挙げられるだろう。
- ④ 本節で詳述した内容については、河野一隆『倭王権の領域構造』（京都大学人文科学研究所編『国家形成の比較研究』学生社）二〇〇五

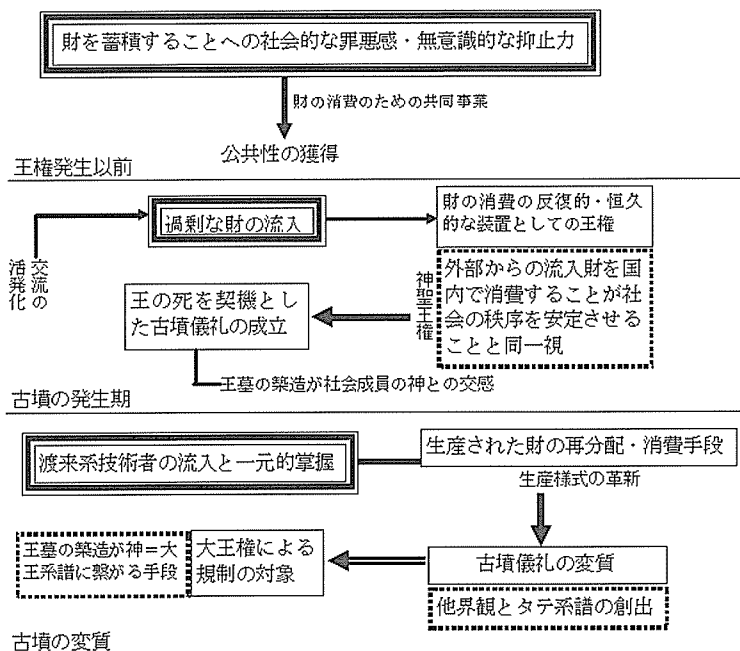
第七章 王墓と社会の基礎理論

一 人類史の中の王墓（第一五図）

本稿では、神聖王権から初期国家の成立にいたる変遷過程を追求する中で、王墓の築造を威信財消費によって解釈する枠組みを示した。日本列島の古墳は、畿内を中心とする政治的諸関係がある程度反映するものではあるけれども、それ以上に社会に埋め込まれた経済的諸関係や共有する観念大系を表現したものであるはずだ。そこから人類史における王墓の

存在理由を追求する糸口を見出すことができるだろう。

狩猟採集を生業とする旧石器時代社会以来、余剰の富の破壊と蓄積された財の消費が反復的に行われる社会においては、成員たちは恒常的に富の蓄積に対する負債感を胚胎していた。したがって特定個人に富が蓄積されると、彼が社会を代表するための公共性を獲得するためには、成員に還元する「気前の良さ」によって信任をはじめて勝ち得たのであった。かくして、信託された社会の意志は、地域集団を越えた公共性を獲得するための何らかの共同事業が必要とされた。それは、たとえば遠隔地での狩猟などの生業への協力、豊穡を祈願し社会の存在理由を確認するための諸儀礼などであったけれども、この時期には墓には投資されなかった。なぜなら、王墓の存在を必然とした初期王権以前の社会にあつて、死とは生との分離ではなく、言うなれば死者は思慕の対象以上の意味を持ち得なかったのだ。しかし、新石器時代以降になって、人類社会は食料をはじめとする生存および生活を維持するために必要となる財の不均等的分配によって、外部から流



第15図 神聖王権から初期国家にいたる古墳の発生と変質

入する財の交換の非対称的な構造が形成されることとなった。特に東アジア世界においては紀元前後に向けて頂点に達する緊張状態が、文物の交流の活発化をもたらすことになった。そこでは、皇帝が直轄する工房で諸国から朝貢された天然素材を加工して生み出された多彩な文物が、支配領域内で消費できる以上に過剰供給され、交換システムが破綻した。この時に、冊封体制などの皇帝による支配の承認を物象化したという付加価値をともなつて、中国においてはそうでなくとも受容国側にとっては威信財へ転化して、一気に東アジア諸国へと流れ出したのである。これは、受容国側の支配共同体にとつて外部威信を表象する上でまたとない好機であつた。当然、領域外部へのアクセスは固定された支配層に独占されており、財を受容した社会にとつても、その域内への再分配によつて社会の公共性を創出する仕組みはすでに破綻してしまつていた。したがつて、中国から絶え間なく流入する財を消費する手段として、反復的・恒久的に威信財の消費するための儀礼とその舞台が支配共同体に必要とされたのである。ここで重要なのは、正当に「消費」したと社会成員から公認されなければならなかつたことであり、蓄財は王として正当な行為とはみなされなかつた。そこで、王墓への副葬行為という一種の供犠によつて、領域外からの財の過剰流入による社会の均衡性の破綻といった危機を、はじめて克服することができたのである。これが、初期王権のモニュメントである王墓の本質にはかならない。さらに誤解を恐れずに、図式的な表現をするならば、紀元前後から朝鮮半島や日本列島に厚葬墓を登場させる直接の引き金となつたのは、新代以降の中国王朝内の貨幣経済の破綻による財の海外流出であつたと考えられ、この意味で、今村仁司が喝破したように墓は貨幣の異なつた表現形として立ち現れたのだ。

しかし、日本列島に限定してみるならば、威信財の消費儀礼とその舞台のための古墳築造という意味だけでは、あれほど全域に古墳築造が波及した理由の説明はつかないだろう。社会成員に古墳築造の意図を了解させ、共感を得るためには、王の死を契機として対面する神観念と他界観が利用されねばならなかつた。そこで、古墳の被葬者である王は神との協力が可能な唯一の媒介者であるという共同幻想によつて、古墳築造という財の消費行為を恒常的に反復しつつ社会的結合を

再生産し、王権の安定性を確保することが出来たのだ。これが、古墳築造を主導した倭王権（初期・盛期王権）の戦略とも合致していた。しかし、これは前述したように、古墳時代中期以降に大変革を迎えることになる。その主体者は渡来系技術者たちであり、弥生時代以来、日本列島に形成されてきた生産・流通関係を根本から大きく変質させていったのである。渡来系技術はそれを持つ者に生産効率の飛躍的な向上をもたらしたので、その技術者の掌握は大王権が独占しなければならなかった。しかし、漂着する全ての渡来人を畿内の大王権が掌握することは不可能であり、西日本に出現する非陶器系地方窯による須恵器生産のように、地方豪族の膝下に技術者が編成された場合には、渡来系技術が飛び火的に波及していくこともあった。かくして、倭王権を支えていた生産・流通関係の秩序は徐々に崩れていかざるを得なかった。これを再編するためには、古墳築造の根幹となる觀念大系そのものに手を付けねばならなかったのだ。そこで、末期王権段階において、古墳の被葬者たる王は神との仲介者ではなく、神そのもののへと神格化し、その擬制的な系譜へ連なることが政治的階層関係の表現手段であるという新たな死生観が創出されることになった。このためには、畿内の死して神となる大王を頂点とする諸豪族のタテ系譜が正しく再編・整備されねばならなかったし、そこでは生と死との截然たる分断を確認する儀礼が新に必要となったのだ。畿内系横穴式石室の導入とは、魂と肉体とはすでに分かれており、横穴式石室は魂の抜け殻となった肉体を保管する場所を確保することを意味していた。だからこそ、横穴式石室は畿内の大王権から積極的に推奨されて群集墳の主たる埋葬施設として全国波及したのであり、その背景には渡来系技術という生産手段の分配などの見返りも渡されたことであろう。ケガレと禊の思想がこの頃から顕在化すること、この死生観の大変革と密接に関連している。すなわち、海上他界へと連続していた他界観を全否定して、生死の分断を強く認識させつつ、会葬者以外にも時間とともに腐朽していく遺骸を目の当たりにできる横穴式石室は、このための格好の舞台装置だったのだ。そこで、倭王は自らを神格化して、死後の戸籍（タテ系譜）の掌握と再編へと乗り出していったのであろう。かくして、初期国家段階の倭国にあつては、古墳築造とは豪族の大王との政治関係の表現手段と化し、社会の公共性を獲得するための装置、すなわ

ち財の大量消費の場、としての機能を喪失してしまったのだ。したがって、古墳は大王権によって政治的に規制され得る対象となり、東アジアの動乱に端を発する六世紀の社会不安に応じて徐々に薄葬化し、一部の終末期古墳を除いては、完全にその命脈が絶たれてしまうこととなる。

二 理論的な展望

本稿では、日本列島における王墓の成立と変質を取り上げて、神聖王権による威信財の破壊がなぜ国家形成期の王墓築造となるのかという問題について、一般理論からの説明を目指したものである。最後に、比較考古学的に研究を進展させていくための理論的な展望について言及することにした。

文明交流圏の周辺地域^④においては、内外交流の活発化によって領域内で必要とされる以上の財が流入し、社会の維持のために必須となる財の交換システムが破綻を来した。このため社会の平衡状態を調整する機能を維持するためには、新たな公共性を反復的に獲得し続けるための儀礼が必要となった。その最も有効な方法は、通常の共同体の交易関係では入手困難な外部威信を表象した財を威信財へ転化させ、公衆の面前で消費（破壊）することである。その最初には人的消費（殉葬・犠牲）によるものであり、後に形式化した仮器に置換されたのかもしれない。その舞台である埋葬儀式は秘儀的な色彩を強め、限定された社会構成員と媒介者である王とが共に神と交流するといった異次元交換を行う場として位置付けられたのだ。

しかし、ひとたび王墓が成立すると、そこでの儀礼の反復（＝古墳の築造）は社会維持の根本原理に置き換えられる。なぜなら、非等質的な社会において公共性を獲得し、そこから王権の中心―周辺関係を形成していくためには、異次元交換に必然的に伴う第三者排除の論理という暴力性を、面前大量消費による副葬と王の公開埋葬という王墓への葬送儀礼に埋め込むことで、恒常的に回避され続けなければならないからだった。

ところが、このような社会構造を否定したのは、領域外から流入する生産技術であった。新たな生産関係で結合された地域間関係が現出すると、古墳の被葬者はもはや公共的な異次元交換の犠牲者の地位を失う。埋葬儀礼を社会規範として管理・強制することで、社会集団を差別化し、統治する神格化された存在へと変貌させた。神聖王権下の威信財を破壊・分有する古墳時代社会の生産様式は変質し、中央政権下に掌握された技術集団の派遣によって、地方へと生産手段が再分配されることになる古代（成熟）国家の生産様式にむけて大転換を迎えたのだ。モノユメント築造が本来具有していた社会的機能はもはや喪失し、王墓は公権力によって存在理由が否定され、物象化されない公共機能の創出が希求されるようになった。これが、国家形成期に王墓が誕生し、消滅していく由縁なのである。

① 足立啓二『専制国家試論——中国史から世界史へ——』柏書房 一九九八

② 今村仁司『貨幣とは何だろうか』ちくま新書 一九九四

③ 古墳時代は威信財を消費するための過剰な儀礼が創出された時代であり、古墳築造は社会を維持するために王権と共同体成員の双方から必要性が認識されていたという本稿の理解に立つならば、王権はそれを統治のための道具に転化し、威信財の交換と埋納という富の破壊とその代償としての政治的序列の獲得というメカニズムを生み出したの

ではなからうか。墳形と規模による二重支配によって特徴付けられる

「前方後円墳体制」（都出比呂志「日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱——」（『日本史研究』三四三、日本史研究会）一九九一）や副葬品組成の階層的な保有という現象も、倭王権の強権的な施策だけでは成立せず、社会的な必然性があってはじめて維持できたのではなからうか。

④ 河野一隆「極東文明」（『埋蔵文化財研究会二五周年記念論文集 班』Ⅱ 埋蔵文化財研究会 二〇〇二）

（九州国立博物館）

【付記】 本稿校正中に、朴天秀『加耶と倭 韓半島と日本列島の考古学』（講談社、二〇〇七年一〇月刊）が、刊行された。本稿第四章の内容と触れ合う部分も多く、特に、加耶と日本列島の特定地域同士の地域間関係や、両者の互恵的な関係を考古学的な実証に立って明らかにした内容は刮目すべきものである。いずれ、機会あれば詳細な議論をしたいと考えるが、ここでは時間と紙数の関係上、やむなく割愛することにした。

Kofun Tumuli as Monuments of the State Formation Process

by

KAWANO Kazutaka

Why royal tumuli with special burial structures and accompanied by many grave goods appeared concomitant with state formation is a basic problem of human history. I argue that the special characteristics of the historical shift from sacred kingship to the early state are embedded in the transition from Wa 倭, ancient Japanese, kingship to Wa state, which occurred during the transition from Yayoi to Kofun period. From this standpoint, I reconsider the transition from Yayoi 'Royal tumuli' to Kofun mounded tumuli and the significance of the mounded structures as monuments of state formation. Why was a great deal of social energy concentrated in mound building for a single individual and why did these tumuli appear in the period of state formation? I propose the following as explanations for these problems. In order to stem the flow of the wealth outside the territory of the king, such wealth had to be regularly and safely consumed within the territory of the king, meaning that it was converted into forms of wealth invested with prestige. A social system was created by members of this society by revising these debt relations of exchange and consumption into the basis for actual socio-political relations and embedding them within the society. At the same time, the formation of core-periphery relations based on this wealth represented by prestige goods produced the boundaries of the territory of the king. This can be regarded as a preliminary step toward the mature Ritsuryo 律令 state, which appeared in the middle Kofun period. However, this mechanism was destroyed by the control and diffusion of immigrant engineers by Wa kings, and the operation of tumuli lost the function of a public work projects. In this way, the role of the royal tumuli that was characteristic of the process of state formation came to a close.